グスタフ・クリムトの制作過程を巡る素描，完成作の調査

前 田 朋 美　　美学美術史博士後期課程 2 年

1　はじめに

19世紀末のウィーンを代表する芸術家，グスタフ・クリムト（1862–1918）は，油彩画や壁画等，完成作品とともに数多くの素描を制作している。これらの素描はそのモティーフや構図から，完成図の単なる下絵ではなく，絵画制作，ひいてはクリムト芸術において積極的かつ重要な役割があると考えられる一方，素描から完成作へと至る過程は一体どのようなものであり，素描にいかなる役目があったのか，謎も残されている。この謎を解明する手掛かりをみつけるべく，現地調査に赴いた。

調査期間・調査地

2008年 9 月17日～10月 7 日　オーストリア，ウィーン

調査機関一覧

調査機関	調査内容
アルベルティーナ素描美術館	素描調査
ベルヴェデーレ美術館	展覧会（Klimt und Kunstschau）
分離派会館	ベートーベンフリーズ
美術史美術館	階段室壁画・彫刻作品
ブルグ劇場	階段室天井画
レオポルト美術館	肖像画，風景画
MAK 美術館	ストックレーフリーズ（下絵）・ウィーン工房の作品
カールスプラッツ美術館	女性肖像画，寓意画
am Steinhof 教会	オットー・ワーグナーによる装飾
Klimt Archiv	事前調査
オーストリア国立図書館	文献 / 資料収集
ウィーン市立図書館	文献 / 資料収集
オーストリア応用芸術大学・付属図書館	文献 / 資料収集
MAK 美術館付属図書館	文献 / 資料収集

調査目的

本来素描とは，完成作の基礎，あるいは様々なモティーフを描き込む練習と位置づけられる。クリムトは素描を画業初期から1914年に亡くなるまで絶えず描き続けた。全体の構図を描いたものはごく僅かであり，大部分を女性像が占めている。その数は4000とも6000とも言われ，正確な数字は不明である。先行研究により，どの完成図にどの素描が区分されるのか，現存している素描の範囲内で整理され，完成図内のモティーフにある程度対応していることが明らかになった。

しかしながら素描研究は現在，足踏み状態である。なぜなら，似たようなポーズを描いた何枚もの素描から，どのような制作過程を経て完成図に至ったのか，不明であるからだ。報告者は素描と完成図の対応関係の詳細な探求により，クリムトの完成作に至る思考過程を提示できるのではないかと考える。さらに，素描と完成図を比較するだけでは研究に発展はみられないゆえ，素描と完成図の間には，何らかの介在要素が存在するのではないかと仮定し，博士論文を最終目標に，具体的には年度末の認定論文に向けて研究を進めている。本調査は，介在要素を明らかにすべく実見による素描調査，そして素描と完成図の間の異なる要素として写真の可能性に関する調査，文献資料の収集を中心に行った。

調査方法

絵画，壁画及び素描の調査は主として実見に基づく詳細な観察を行うことである。採寸は既に先行研究にて明らかにされていることから本調査では割愛している。写真撮影を行う対象作品は美術史美術館，am Steinhof 教会，カールスプラッツ美術館，オーストリア応用芸術大学の所蔵する写真とした。

主に以下の 4 点に基づいて調査を行った。第 1 に，アルベルティーナ素描美術館の所蔵するクリムトが制作した素描の実見調査。第 2 に，美術史美術館，ブルグ劇場，その他美術館の所蔵するクリムトの壁画，天井画，油彩画，ポスターの実見による詳細な観察，一部の作品の写真撮影。第 3 に，ベルヴェデーレ美術館にて10月 1 日より開催されている“Klimt und

Kunstaschau”展におけるクリムト作品の取り扱い，つまり現在のクリムト作品がどのように展覧会で取り扱われているのか，作品の詳細な観察をも含め調査する。この展覧会では，ローマ近代美術館に所蔵されている油彩画等，普段ウィーンでは実見できないクリムト作品，また1908年当時のウィーン分離派の活動，展示内容が再現されている点において非常に画期的といえる。第4にクリムトと同時代のものから，現在に至るまでのマイクロフィルムを含む文献資料の収集である。

2　素描調査

アルベルティーナ素描美術館はクリムトの素描が数多く所蔵されているが，一回の調査に付き，最大20枚までと制限されている。本調査では，報告者が特に専門とする学科絵「医学」の作品を中心に，初期，後期の作品も含め詳細な観察を試みた。その結果クリムトにとって素描とは，構想やアイディアを書き留めるだけではない，それ以上の役目があると確信すると同時に，クリムトの描写技術の高い能力をみることができた。

素描に予想以上に大きな紙を使用している点，このサイズは画業を通してほとんど変化していない。断定は出来ないが，頭に思い浮かぶまま，走り書きするようなサイズの紙ではないと報告者は考える。素描がほぼ同時期に制作されているが，紙質が多種多様である点，「医学」のための制作期間と限定されているにも関わらず，表面が滑らかなものから，毛羽立っているものまで様々であり，紙質により，線の滑らかさ，勢いに変化が生じている。また，先行研究では画業後半から晩期にかけて素描の線が崩れ，平面的であると指摘されるが，一例として23546（図1）は，頭部の素描の線が細かな蛇行を伴う短い輪郭線をいくつも重ねているが腕や衣服には，長いゆるやかな1，2本の輪郭線により描かれている。線に強弱をつけることによりモティーフの立体感を十分に表している。

学科絵「医学」の素描を制作する際に，人物モティーフの体の表面内側に細かな並行線を描き入れ，それは陰影を表していると解釈されてきた。しかし報告者の調査結果により，体の捻り，動きの部分に細かな平行線が入っていることから，陰影というより体の動きを強調しようとする部分に平行線をいれていることが新たにわかったのである。

素描が制作過程のどの段階で描かれたのか1つの手がかりとして，転写スケッチと称される，方眼紙状に鉛筆で縦，横線を描き入れた紙を利用した素描作品が存在する。完成作のカンヴァスに移行する前段階として，方眼紙上からモティーフの位置，ポーズ，サイズをわかりやすくしたものである。実見調査から，ここでは肖像画「セレナ・レーデラー」の転写スケッチ，35170（図2）を例とするが，縦，横線がモティーフに描き直した後がみられない点，方眼紙（縦1.5× 横1.5cmの格子状）に消し直しがみられないことから，モティーフを描写した後に，最終的に方眼状の縦，横線を描いていたことがわかる。顔の輪郭線をぼやかし

図1

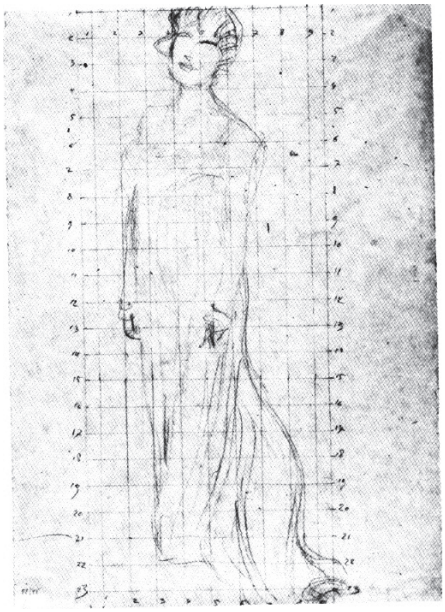

図2

ているが，衣服の襞，輪郭線は明確に緩やかなカーブをつけている。両腕の輪郭も同様に緩やかにカーブをつけているが，手，指先は非常に曖昧である。35170と「セレナ・レーデラー」に該当する素描群の中で，体の向き，ポーズ，衣服の襞の点で一致する素描は残されておらず，また完成作と髪型，衣服の襞の点で相違が生じている。転写スケッチは完成図の前段階としてモティーフの体の位置，向き，遠近の調整に留まっていないことから，モデル→素描→転写スケッチ→完成図という図式に当てはめることが困難である点に気がつく。つまり，素描，転写スケッチ，完成図の間に何らかの異なる要素，写真や彫刻といった要素が介在すると予想できる。素描集の印刷された画像では確認できない紙質，輪郭線の強弱や勢い，ハネ，筆記用具の種類や色等，新発見の連続であり，極めて有意義であった。課題として，転写スケッチも1枚，素描全体としても20枚程度と，素描調査数が少ないため，客観的な特徴を指摘するには不十分である。今後継続して実見調査を行う必要がある。

3　天井画の実見

主に美術史美術館（図3），ブルグ劇場の天井画（図4），分離派会館の壁画（ベートーベンフリーズ）の詳細な観察を試みた。クリムトは画業初期から中期にかけて壁画類を制作しているが，この時期には画業初期に形成していた「芸術家カンパニー」によって共同制作された作品が多くを占めているのが特徴である。先行研究にて，どの部分を誰が制作したのかについて，ほとんどの作品で明らかにされている。写真でのみ鑑賞してきたゆえに，細かな点などが不明であり，完成作について知る上でも，詳細な実見が必要と判断した。

美術史美術館の天井画，ブルグ劇場の天井画が初期，分離派会館の「ベートーベンフリーズ」が画業半ばに制作されている。初期に制作された両天井画は共同作業にも関わらず，作品全体に調和が保たれ，下から見上げる点も考慮し，モティーフの構成が決定されている。

ブルグ劇場の天井画は，円形に反ったかまぼこ型の天井（図5）である。このかまぼこ状の曲面が遠景部分や客席と舞台との距離感を的確に演出していることに気がつく。曲面を距離感の演出に利用している点は「芸術家カンパニー」全体に共通していることだが（図6），人物モティーフが写実的な描写であるのに対

図3

図4

図5

図６

図７

して背景は柔らかく，わずかに霞がかり，この対立が際立っている点がクリムトの担当部分（図７）の特徴といえる。

クリムトの作品は画業に沿って描写が変化しているのは明らかであり，先行研究にて既に指摘されていることでもある。しかし，画業初期に制作した美術史美術館の壁画は特に平面的であるが，周囲の異なる芸術家の描写と違和感が生じることもない。描写変化は単に立体的から平面的な描写へ，この変化に呼応して装飾的な要素が高まるという単純な流れでは無いことに気がつく。特に分離派会館に設置されている「ベートーベンフリーズ」は油彩であるにも関わらず，クレヨンのような柔らかい筆致，淡い色彩である。モティーフには輪郭線，髪の毛，衣服，幾何学的な装飾による線が描写され，独特の量感が表れている。この独特の量感表現は，写真，彫刻の要素が関与した結果ではないかと報告者は考えている。本調査により，クリムトの人物像は立体的から平面的表現へ変化するという単純な構図ではなく，人物像の量感表現の多様性と判断すべきであり，そして先行研究ではクリムトの特徴，特異性に捕われるのではなく，むしろ作品全体，建物全体で捉える必要性に気づく。しかしながら，壁画に関して彫刻と素描ないし完成作品の対応関係を調査すること，またどのように調査をすべきか，調査方法の足がかりをみつけることも課題といえる。

４　Klimt und Kunstschau

Schloss Belvedere（オーストリア絵画館）にて2008年10月１日から始まったKlimt und Kunstschauは，1908年にウィーン分離派によって開催された展覧会（Kunstschau）を再現する試みである。この展覧会は，Kunstschau 1908の開催からちょうど100年という節目の年であることから，計画されたものである。1908年のKunstschauはオーストリア・ハンガリー二重帝国の皇帝，フランツ・ヨーゼフ一世の在位60年の祝祭と関連して開催されている。今回なぜ，Kunstschauを再現しようと試みたのか。それは，1900年初頭にウィーンを中心にヨーロッパで誕生した芸術作品（生活用品から工芸，絵画作品に至るまで），いわゆるクリムトグループとされる集団が中心を占めているが，彼らの作品を21世紀の私たちの新しい視点で捉えなおそうとするためである。加えて，現代ではクリムトの作品を特別視する傾向があるが，クリムトグループ全体の活動の一部として考察を加える必要性をも指摘している。

Klimt Archivの研究者であるM. Seiser氏の御配慮により，９月30日に行われたオープニングに参加することができた。これまで，個々の芸術家に特化して作品を鑑賞し，考察を加えてきたが，この展覧会では，1900年頃のウィーン分離派がどのような活動をしていたのか包括的に捉えた上で，個々の芸術家による作品に解釈を与えることができるという考えに基づき展示されている。展覧会の会場内も，1908年Kunstschauの展覧会の当時の装飾を参考に，作品の設置，壁紙，部屋割りがなされていた。本展覧会はベルヴェルベデーレ宮殿（Schloss Bervedere）の下宮を会場とし，白を基調とした内装によって展示空間が細かく分けられていた（1908年の展覧会の会場は，Bervedere宮殿ではない）。オープニングを利用しての展覧会，及び作品調査であったため，写真撮影が不可能であったことは非常に残念である。しかし，会場内に漂うオープニング独特の雰囲気は，1908年に開催されたKunstschauの展覧会にタイムスリップをしているかのようであっ

た。

クリムトの作品は会場内の最も奥まった一部屋が割り当てられ，部屋の内壁に油彩画，外壁に素描6点ほどが展示されていた。1908年の展覧会に出品された作品の全てを展示することは不可能であったようで，油彩画4点ほどはモノクロ写真が作品と並んで展示されていた。

1900年初頭にウィーン分離派が歩んでいた道のり，それは直線，円形を組み合わせ，幾何学的でありながら生命力に満ち溢れた，装飾的でありながら写実的である姿を見ることが可能である。会場内全体からクリムトの作品を捉えた際に，クリムトの絵画作品はこの流れに逆らうことなく，独特の生命感を持った人物像，風景画を描いていたことがわかる。これまでクリムトの作品は，描写されたモティーフや構成の特異性ばかり指摘されてきたが，分離派というグループを作り，後にこのグループとも袂を分かつことになるが，このグループ内で活動することの芸術的な意義が浮かび上がる。クリムトの作品を解釈する際に分離派全体としての緩やかなまとまりを意識することの重要性を改めて今回認識することができた。

同展覧会では，油彩画だけでなく子供のためのおもちゃから，ポスター，置物に至るまで展示され，まさに20世紀初頭のウィーン芸術界における総合的な芸術活動を垣間見ることが可能であった。今後の課題として本展覧会で展示されていたクリムトの素描作品を含め，1908年の展覧会をどこまで忠実に再現していたのか，クリムト及びクリムトグループに属する芸術家集団の織りなす世界を現代の新しい視線による解釈とは具体的にどのようなものであり，その意図はなんであるのか，今後解明していく必要がある。

5　文献資料

2007年に出版されたクリムトの新レゾネに収められた文献表に基づき，網羅的に資料を収集することを第一に，特にクリムトが写真と出会ったと推測される芸術学校時代及び画業初期に関する資料収集に重きをおいた。

中でも本調査にて，ウィーン応用芸術大学の地下倉庫に保管されていた19世紀半ばから20世紀半ばに至るまで描写訓練の教材として使用されていた写真資料に遭遇したことは，幸運であった。残念ながらその一部しか調査することはできなかったが，人物（図8），動物（図9），建築物，壁画，イタリアルネッサンスの様々な芸術作品，風景，大理石や石膏によるトルソ等，多種多様な写真が揃えられていたことがわかった。先行研究では，芸術学校の学生時代に写真を利用していた点の指摘はなされてきたが，使用された写真

図8

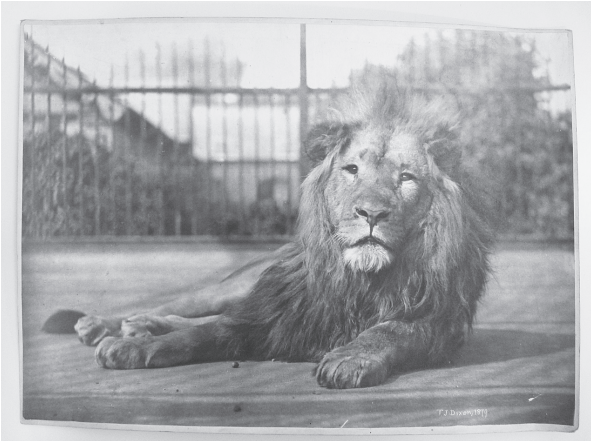

図9

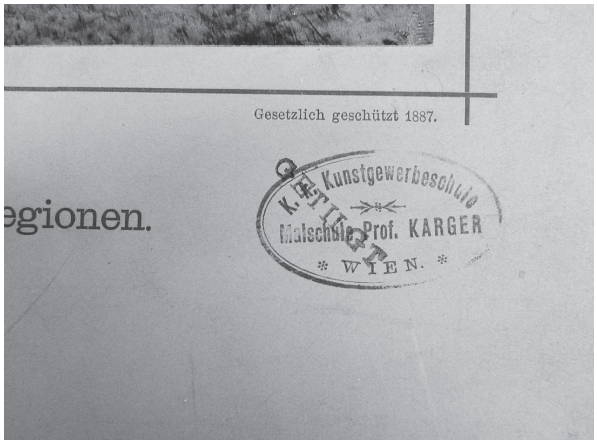

図10

の種類に関して不明であったが，これらの写真本体に1886年の刻印（図10）がみられ，ウィーン応用芸術大学が設立された当時からこのような写真教材を使用していたことが明らかになった。モデル，白黒写真の両媒体からいかにして人物表現にみられる幅ひろい量感をみにつけたのか，モノクロ写真から素描へと移行をどのように解釈するのか，新たな課題といえる。

6　調査により明らかになったこと

素描の詳細な実見により，素描の線は素早く，時に殴り描きされたようでありながら，作品の完成度の高さから，完成図の予想図を頭にいれた上での素描制作であり，素描が制作過程を表す極めて重要な要素であることが指摘できる。

クリムトは作品を制作する際に，芸術学校の学生であった頃から写真を使用していた事実は明らかである。今回のウィーン応用芸術大学の地下倉庫に眠っていた写真資料の一部の調査により，クリムトが写真という媒体物に，芸術家としての知識，技能を養っている時期に頻繁に接した事実が明らかとなった。しかし誰が，いつこれらの写真を購入し，クリムトが実際にいずれの写真を使用したのか，不明な点が多々残されている。調査計画の段階では，写真と共に彫刻に代表される立体物の素描ないし完成図への介在をも調査対象に含んでいたが，現段階では，彫刻に関して不十分である。しかし先行研究にて指摘されることのなかったA. Maulbertschからの群像モティーフの影響に関する考察の必要性等，制作過程を探る報告者の研究が本調査により一歩進んだといえる。

参考文献

Alfred Weidinger, *Gustav Klimt*, Prestel Verlag, New York, c2007.

Alice Strobl, *Gustav Klimt. Die Zeichnungen.Band I; 1878–1903*, Salzburg, Verlag Galerie Welz Salzburg, 1980.

Alice Strobl, *Gustav Klimt. Die Zeichnungen.Band II; 1904–1912*, Salzburg, Verlag Galerie Welz Salzburg, 1982.

Alice Strobl, *Gustav Klimt. Die Zeichnungen.Band III; 1913–1903*, Salzburg, Verlag Galerie Welz Salzburg, 1984.

Alice Strobl, *Gustav Klimt. Die Zeichnungen.Band IV; 1878 NACHTRAG 1918,* Salzburg, Verlag Galerie Welz Salzburg, 1989.

Hrsg. Von Agnes Husslein-Arco und Alfred Weidinger, *Gustav Klimt und die Kunstschau 1908,* Prestel Verlag, 2008.

図版目録

※（ ）内の番号はA・ストローブルの素描集における番号

図1　グスタフ・クリムト　23546　Halbbild von vorne　紙・鉛筆，501×325mm（2723）
Alice Strobl, *Gustav Klimt. Die Zeichnungen.Band III; 1913–1903*, Salzburg, Verlag Galerie Welz Salzburg, 1984. より転写

図2　グスタフ・クリムト　35170　Etwas nach links stehend mit herabhängenden Armen Übertragungsskizze 紙・鉛筆，455×317mm（442）
Alice Strobl, *Gustav Klimt. Die Zeichnungen.Band I; 1878–1903*, Salzburg, Verlag Galerie Welz Salzburg, 1980. より転写

図3　オーストリア美術史美術館　階段室　壁画部分

図4　ブルグ劇場　階段室　天井画

図5　ブルグ劇場　階段室　ドーム部分

図6　ブルグ劇場　階段室天井画　フランツ・マッチュ担当部分

図7　ブルグ劇場　階段室天井画　グスタフ・クリムト担当部分

図8　オーストリア応用芸術大学　図書館所蔵　白黒写真　人物

図9　オーストリア応用芸術大学　図書館所蔵　白黒写真　動物

図10　オーストリア応用芸術大学　図書館所蔵　白黒写真　刻印部分